

今週の新刊



編集工房ノア／
2000円

大西明子『神戸モダンの女』は、

これが初めての小説とは思えない出来栄え。神戸で生まれ育った著者の義母の人生を、大正、昭和の世相を通して描く。それは堂々たる「女の一生」だ。

三崎多津子は、山つけのある父と神経症を病む母を持つ。昭和初期にミッシェンスクールへ通い、英語の授業、バイブル、ダンス、裁縫を含む行儀見習いを身に付

け、これがのちに生きる。事務員からダンサーとなり、好きだった青年と結ばれた。しかし、時代はやがて暗雲覆う戦争へ突入。

緑色の市電、小高い丘の上にある公園、メリケン波止場、「ユーハイム」の喫茶室……モダン都市神戸の風俗がたつぷり登場。多津子は、何度も裸一貫になりながら屈せず、自立する女として洋裁に「生きがい」を見いだす。そのま

ま朝ドラになりそう。同じ時代、無数の多津子がいいて昭和を作っていた。これだけの力量があれば、著者には、次に自伝を書いていただきたい。

週刊「サンデー毎日」2019年9月1日号

文芸社特別賞

『神戸モダンの女』 大西明子（兵庫県）

●講評

太平洋戦争の影響を受けて激動の時代を生きた女性の半生記。主人公に位置付けられている女性は本作の作者の義母であり、大正・昭和を生き抜いた女性の姿をフィクショナルに描いた作品である。ドラマを描出する文章力に非凡な才能を感じた。神戸のダンスホールのダンサーとして働く姿など、当時のモダンな空気が豊かなイメージとともに浮かび上がってくる。他人の人生を描いたとは思えないほどディテールは丁寧に書き込まれ、人間関係が織りなすドラマにもリアリティが感じられる。

毎日新聞2018年8月23日

「神戸モダン」のセンスと心意気で 生涯を生き抜いた主人公とその人生

消え去っていく多くの家族の物語を代弁するかのようここに置かれている

梶 葉子

神戸は様々なイメージを喚起させる街である。東京を脱出した俳人、西東三鬼の住んだ山手の異人館、田辺聖子の小説の舞台となった風見鶏の回る洋館、『細雪』に登場するトリアロードや三ノ宮……数回しか訪れたことのない神戸だが、異国情緒が漂う街並みを感じ返しつつ本書を読みはじめた。

本書は定年退職後の2010年に大阪文学学校に入学した著者の300頁を超える渾身の長編小説である。18年度の文芸社主催「毎日新聞社後援の「人生十色大賞」の特別賞を受賞している。

ヒロインのモデルは著者の義母と「あどがき」に書かれていたが、大正時代に神戸で青春時代を送り時代に翻弄されながら戦前、戦中、戦後を意志的に生き抜いた生き方にたちまち引き込まれた。巻末に置かれた、大阪文学学校でチューターをつとめた夏当紀子の解説によれば、「大阪文学学校の教室に、作者大西明

子さんは、いつもおしゃべりな佇まいで現れました。(略) 聞くと、夫の母、つまりしゅうとめさまからその生前、服装について学ぶところが多く、若い頃はミシンを踏んでいろいろ服を縫ってもらったといいます」と記している。著者が数年をかけてこの大作を書き上げた背景には、長く

高校で勤務してきた著者の、おしゃべりでモダンな義母の自立的な生き方への深いリスベクトと共感があつたに違いない。

どんな家族にもそれぞれの物語がある。人は生まれ落ちた土地や暮らした家、親兄弟によって織りなされるかけがえのない物語の一員とも言える。しかし、どんなにかけがえがなくなると、固有の物語は家族の語らいやそれぞれの思いのなかで反芻されやがて消滅していく運命にある。二度と戻れない貴重な時空を核にして一人の女性の人生を浮き彫りにしたこの物語は、消え去っていく多くの家族の物語ととも「ミシンを踏

大西明子 著
▶ 神戸モダンの女
8・1刊 四六判336頁 本体2000円
編集工房ノア



2019年9月14日

図書新聞

(ライター)